

驢馬

後風呂に入って寝るだけである。驚くべきは、そのすべての動作中スマートフォンがそばにあり、また常に操作されているということである。

スマートフォンとは、ネット、という広大な「空間」の、端末、である。使用者はそれを通じて別「空間」に接続しているのだ。ただの有限のハコである（しかもその多くが住人の理想より小さく不自由である）建物など目を向けるはずもない。

人はスマートフォンを手にサイボーグ化することによって、住空間に居ながらにして住空間から逃避する術を身につけたのである。

住人がついにサイボーグ化し、住空間から逃避したとき、住宅は廃墟と化す。廃墟となった住宅はもはや不在の主人に対して健気にも（多くの住人にとっては不満足な）空間を提供しつづけるほかない。もはや住宅は『生活の場』という大役を、その構造では支えきれなくなっている。

まだ建築として辛うじて、空間、というゴーストを宿しているが、住人なきいまそれもいつまで続くのであろうか、...

廃墟の行き着く先は『無』であろうか。いや、それは少々拙速な推察であろう。街中が廃墟となるこの『ディストピア』で、待ち受けるのは一転、『ユートピア』である。

我々は様態は違えどもこのようないディストピア的状况を幾度となく経験している。「世間は常なきものと今ぞ知る奈良の都の移ろふ見れば」と詠まれた平城京や、関東大震災後の東京、東日本大震災後の東北などである。特に、原子爆弾の投下によって壊滅的な打撃を被った広島・長崎については、まさに人間が意図的に生成したディストピアであった。

丹下健三自ら撮影したものとして知られている広島平和記念資料館の建設中の写真は、そのディストピアを象徴する乱雑とした墓地を前景としている。当時最先端のモダニズム建築がこの世の地獄を味わった場所にまさに芽生えようとしている瞬間の写真である。ユートピアを感じずにはいられない不思議な写真であるが、このように、ディストピアとはユートピアと表裏一体、ほぼ同時に現れるものなのである。

この「夢のマイホーム」はそうしたユートピア（あるいはディストピア）に建つべき住宅である。

少々唐突ではあるが、ここからはこの住宅を便宜的に「驢馬」と呼ぶことにする。

「夢のマイホーム」とはいつから言われ始めた

言葉なのだろう。少なくともその表現が生まれてから「久しい」といつてもよい時期にきている。夢のマイホームが生まれて、それはどのような成長を遂げてきたのであろうか。

建物について言えば、かつては長いもので100年の長きを耐える日本建築が、今や20年で建て替えとなることも珍しくはない。

昨今はリノベーションとして住機能の刷新・更新を図る操作も行われるが、往々にしてそれは外科手術的（ヤブにいえばロボットミキサー手術的）とも言える手法であり、その結果、建築は大きな開頭手術の果てにある種のポウエリスムの様相を呈している。

また昨今の、建築、についていえば、スマートフォンの宣伝文句とならんら変わりのない『より軽く』『より薄く』『より複雑なことをより単純な形で』という金科玉案によって、その質量（力）を次々と切除していく。

まるでイカロスの翼のように、その高きを望むほどにその身を溶かし落としてしまふのである。

住宅について言えば、先に述べたように建て替えまでの、寿命、はかつての15まで凋落しているが、さらに早く寿命を迎えるのは『設備』である。設備の寿命は単純な耐用年数が建物に比べて短いことに加え、機能的耐用年数など様々な要素で早々にその寿命を迎えてしまふ。機能不全を起した設備に対して対症療法的にリノベーションを行い、新たな設備を導入したとしても、一方で古い配管はそのまま残されるといふケースも珍しくはない。

このように更新不能として取り残される設備・配管は建物の癌、である。

さて、ここで人に目を向けると、人はもはや建物に興味など示してはいない。

ある程度の気積と温熱環境が満足されれば、住人はウダツの高さなどにこだわりはしないし、大黒柱さえあってもなくてもよいと考えているのである。

既にその多くがデジタルネイティブの世代となった住人達はそのユビキタス技術を信仰しているが、住人が家でとる行動といえはコンビニ（街なかにはみ出した冷蔵庫）から調達した食料を食卓に運び、スマートフォンを見ながら食べ、その

この驢馬は現代建築らしく、その皮膚は薄く骨格は華奢である。驢馬は主食である電気や情報を食べるために、インフラストラクチャから配管・配線を引きずり出しては食べ、驢馬の内蔵の

そしてある時がくるとそれを噛みちぎる。そしてまた新たに配管・配線を

引きずり出す。

は古くなれば新しい器官

に取り替え

られ、古い器官はそのまま

体内に残置される。

驢馬の足は地面に固く拘束されており、

さながらトラバサミにかかった獣の様相を呈している。薄く皮膚のように見えた部分も、実は驢馬を土地に拘束するガリバーにかけられた縄である。驢馬は身じろぎひとつ許されることなく土地に拘束されている。

そして体内では電気羊が三頭、目隠しをして寝ている。

